

大乘集菩薩学論 Śikṣāsamuccaya 所引の 金剛幢經における代受苦

戸 田 裕 久

1. 『大乘集菩薩学論』の資料的価値

『シクシャーサムッチャヤ (Śikṣāsamuccaya)』すなわち「学処要集」と訳しうる題名をもつ論書は、そのサンスクリット語写本には作者名を欠いているが、チベット語訳およびチベット語註釈書における記述から、シャーンティデーヴァ (Śāntideva 寂天) という名の学僧の編著によるものと見做してよいようである⁽¹⁾。

その漢訳『大乘集菩薩学論』は、前半の巻第一から巻第八まで (集布施学品第一之一から護身品第六之一まで) は北宋代の1004年から1058年までの間に法護等により、後半の巻第九から巻第二十五まで (護身品第六之二から念三宝品第十八之四まで) は1058年から1126年までの間に日稱等により訳経院にて翻訳されたものである⁽²⁾。なお漢訳には「法稱菩薩造」とあり因明の大成者として知られる法稱 (ダルマキールティ Dharmakīrti 7世紀頃) を作者としているが、漢訳者たちが見た梵本にそう記してあったか否かは定かでない。(法護の法と日稱の稱を合わせて法稱?!)

シャーンティデーヴァ (Śāntideva 寂天) は7世紀後半から8世紀にかけて (650~700年頃) 活動した仏教僧であり、中観派 (Mādhyamaka) 帰謬論証派 (プラーサンギカ Prāsaṅgika) の系統に属するチャンドラキールティ (Candrakīrti 月称, 7世紀中頃) の後継の論師とされている。彼には『大乘集菩薩学論 (シクシャーサムッチャヤ)』の他に『入菩提行論 (ボーディチャルヤーヴァターラ Bodhicaryāvatāra)』と『経集』という著書があったと伝えられており、そのうちの前二著が現存している。いずれも、空 (śūnya) の立場から悟りへの道、菩薩行を説くものである⁽³⁾。

『大乘集菩薩学論』には多くの經典類が論述内容の典拠すなわち教証として引用されている。その際に「如○○○曰」あるいは「如○○○説」という形で經典類の題名が示された上で、そこからの引用文が続くという形式を取る場合が多い。中には「般若経」のように同系統の經典群を漠然と指して言うこともあるが、大抵は固有名詞を用いて出典を明示している。ただし、具名よりも略称や通称が用いられていることの方が多く、また明らかに同一と思われる經典が複数個所で引用される場合に異なる呼称を与えられていることが少なくない。このような引用文献名に関する表記の不統一は、サンスクリット語原典において元々異なる題名であったもの

を忠実に翻訳したことによる場合もあるし、漢訳者が単独ではなかったことによるのかもしれないし、あるいはまた、知名度が低く訳語も確定していないものについては漢訳者が試案として暫定的な訳語を充てたこともあったであろう。

このように出典の示し方に統一を欠いていることを承知の上で、『大乘集菩薩学論』に言及されている經典類の名称を数え上げると110書ほどになり、そのうち同一の文献を異なる題名で示すものが約20例あった。重複分を差し引くと、『大乘集菩薩学論』にはおよそ90にもよる数の經典類からの引用文が含まれていることになる。というよりはむしろ、この論書はほとんど經典類からの引用文から成ると言えよう。

『大乘集菩薩学論』は、菩薩の修学すべき事柄(学処)を主題として、多くの經典から関連する記述を集めて構成された選文集であり、提題の役割を果たす27詩節を除けば編著者の著述箇所はごくわずかである。また引用するに当たっては、編著者による恣意的な言い換えや付加的説明などの加工をせず、かなり忠実に原典から引き写しているものと思われる。その創意工夫の欠如が、むしろ好都合であり、重宝がられることもある。

大乘經典のほとんどについて、そのサンスクリット語原典が散逸しているという状況にあつては、たとえそれが断片的なものであつたとしても、論書等に記録保存されている引用文の持つ資料的価値は高い。上記のように『大乘集菩薩学論』には、およそ90もの經典類が教証として敬意を以てその題名を挙げられ、そのうちの幾つかの經典からは或る程度まとまった分量の引用が為されている。その中には、サンスクリット語原典の全部または一部が現存しない經典類からの引用も多く含まれているので、梵本『シクシャーサムッチャヤ(Śikṣāsamuccaya)』は写本の発見当初から、原典が散逸した經典の梵本回収及び復元のための貴重な資料を提供するものとして多に期待されていたし、現に多くの研究がなされてきた。

ただし、漢訳『大乘集菩薩学論』が梵本『シクシャーサムッチャヤ』の翻訳として適正なものであるか否かという問題になると、漢訳本の評価はさほど高くはなりえないように思う。漢訳『大乘集菩薩学論』に引用されている經典の訳文は、それ自体がいささか晦渋である。⁽⁵⁾

また、漢訳と梵本を少しく対照してみたところ、分量的にも内容的にも逐一合致するとは言えない状況にあり、漢訳本には梵本からの逐語訳と抄訳と取意識とが混在していることが窺えた。また、『大乘集菩薩学論』に引用されている經典に対する法護あるいは日称その他による訳文と、別の漢訳者による当該經典に対する訳文とを比較対照してみたところ、用語も分量も一致する割合が低いと、出典の相当箇所を同定する作業すらも容易ではないように思われる。

とはいえ、いや、そうであるからこそ、研究する甲斐があるというものであろう。筆者にとつても、ここ数年来関心を持ち続けている事柄、例えば「代受苦」という概念に関わる部分について、少しでも手がかりが得られればと期待して、この文献を改めて繙いた次第である。

出典としては、編著者のシャーンティデーヴァ(Śāntideva 寂天)が帰謬論証派系統の中観

派に属する論師とされていることから、『シクシャーサムツチャヤ』においても中観派の教理に直接関わる般若系の經典が重視される傾向にあるものと予測される。現に、般若經、維摩經、月燈三昧經（三昧王經）、首楞嚴經といった、空思想を説く經典からの引用が多いように見受けられる。それらの經典名が現れる箇所を、大正新脩大藏經所載の『大乘集菩薩学論』（大正藏、第32卷）の頁数と段を以て示せば次の通りである。

般若經（84c, 115c, 117b, 122c, 126b, 134c, 142a, 142b）、般若波羅蜜多經（98b）、八千頌般若波羅蜜多經（83a）、能断金剛經（128a）、能断金剛般若波羅蜜多經（109a）、月燈三昧經（79a, 79b, 85c, 95c, 98c, 101a）、月燈經（97c, 106b, 108a, 110b, 110c, 111b, 112c, 113b, 122c, 128a, 130b, 135b, 142c, 143b）、首楞嚴三昧經（93c）、首楞嚴經（77a）、維摩詰所説經（76b, 103b, 105b）、無垢称經（126b）。

しかるに『大乘集菩薩学論』の主題は、空思想ではなく、大乘の菩薩の修学、菩薩行である⁽⁶⁾。それゆえ、般若系に限らず多彩な大乘經典および密教的な經典からの引用も多い。就中、法華系および華嚴系の經典としては次の題名が挙げられている。

妙法蓮華經（84c, 94a, 142c）、華嚴經（75b, 76a, 77a, 82b, 95c, 98c, 104b, 105b, 111a, 133c）、十地經（77b, 77c, 99b, 120c, 130a, 130b）、金剛幢經（80c, 128b, 130b）、金剛幢廻向（118a）。

このうち「華嚴經」と記されている箇所はいずれも梵本には Gaṇḍavyūhasūtra とあり、これは六十華嚴（佛馱跋陀羅訳『大方廣佛華嚴經』六十卷）中の「入法界品第三十四」、八十華嚴（實叉難陀訳『大方廣佛華嚴經』八十卷）中の「入法界品第三十九」、四十華嚴（般若訳『大方廣佛華嚴經』四十卷）全巻に相当する。「十地經」は、梵本では Daśabhūmikasūtra または Daśabhūmakasūtra とあり、六十華嚴の「十地品第二十二」、八十華嚴の「十地品第二十六」に相当するのであるが、この「十地經」という呼称は、六十巻または八十巻から成る大部の華嚴經すなわち『大方廣佛華嚴經』が集成される以前に、この經典が既に成立し流布しており、単本別行の經典として認知されていたことを示唆する。

漢訳大藏經中には「入法界品」の別訳である『仏説羅摩伽經』等が、また「十地品」の別訳である『漸備一切智徳經』『仏説十地經』等が別行經典のような扱いで収められている。経録にはこれら以外にも幾つもの別訳の存在していたことを示す記録が見られる。

他方、『大乘集菩薩学論』中に「金剛幢經」あるいは「金剛幢廻向」という題名を伴って引用されている經典については事情が異なり、そのような經典が別行經典として漢訳大藏經に収録されていた形跡はないし、経録にもその名が見当たらない。それでも、「金剛幢」というその特徴的な名称がまさに旗印となって、これが六十華嚴の「金剛幢菩薩十廻向品第二十一」、八十華嚴の「十廻向品第二十五」を指していることは容易に推測されうる⁽⁷⁾。

華嚴經のサンスクリット語原典としては、「十地品」「十地經」の原典 Daśabhūmika-sūtra、

および、「入法界品」の原典 Gaṇḍavyūha-sūtra が、ほぼ完全な形で現存する。いま、これらに伍して『大乘集菩薩学論』のサンスクリット語原典『シクシャーサムツチャヤ』中に、或る程度まとまった分量の引用がなされている「金剛幢経」Vajradhvaja-sūtra あるいは「金剛幢廻向」Vajradhvaja-pariṇāmanā と呼ばれる大乘経典のサンスクリット語原文は、当該経典の全体像を知るには及ばないにしても、部分的には華嚴経「十廻向品」の原典研究に裨益する資料として期待されよう。

2. 『大乘集菩薩学論』に引用される「金剛幢経」

漢訳『大乘集菩薩学論』には、下記のように「金剛幢経」または「金剛幢廻向」という経典名が4箇所に見られ、そのうちの3箇所にはやや長文の引用が続いている。そのサンスクリット語原典『シクシャーサムツチャヤ (Śikṣāsamuccaya)』の相当箇所には、Vajradhvasūtra または Vajradhvajapariṇāmanā という題名が4箇所に見られ、3箇所に経典 (sūtra) の引用 (uddharaṇa) がある。⁽⁸⁾

〈1〉『大乘集菩薩学論』卷第三 集布施学品第一之三

(大正蔵, 32卷, 80頁 c 5行 - 82頁 b 5行) :

「如金剛幢経云菩薩以種種布施十方無量貧窮困苦。受施之者。信菩薩行 ……
 …… 願諸衆生踞師子座得佛神道。於諸世間如是觀察。」(145行)

ŚS. 1. Dānapāramitā prathamāḥ paricchedaḥ

(B. p.22, l. 5 - p.33, l. 10 ; V. p.16, l. 32 - p.22, l. 16):

ārya-Vajradhvasūtre'py āha // iti hi bodhisattva ātmānaṃ sarvasatveṣu
 niryātayan …

… sarvasatvā [----]hāsanapratilabdḥā bhavantu sarvajagadavalokaniyā iti //
 (ŚS. B. : 203 lines)⁽⁹⁾

〈2〉『大乘集菩薩学論』卷第十五 治心品第十二之二亦名禪定波羅蜜多品

(大正蔵, 32卷, 118頁 a 25行 - c 26行) :

「如金剛幢廻向中説。具足修習菩薩行者。若所見色対治於愛。……
 …… 不墮輪廻離諸險難得佛妙楽現前無礙超輪廻海水断相続照明佛法起大悲故。」
 (57行)

ŚS. 12. Cittaparikarma-paricchedo dvādaśamaḥ

(B. p.213, l. 3 - p.216, l. 5 ; V. p.117, l. 19 - p.118, l. 33):

sā ca Vajradhvajapariṇāmanāyām uktā / sa bodhisattvacaryāyāṃ caran yāvanti …

… saṃsārasāgarād unmajjayati / buddhadharmaprayuktayā maitryā
 spharatiyādi // (ŚS. B. : 50 lines)

〈3〉『大乘集菩薩学論』卷第二十 増長勝力品第十六

（大正蔵，32卷，128頁 b 18行 - 129頁 a 14行）：

「如金剛幢經説。如日天子出現世間独一無侶。所歴境界而無退転。……
…… 不待他請而方救護。無少善根而不回向。以諸衆生而為莊嚴。」(56行)

ŚS. 16. Bhadracaryāvidhiḥ ṣoḍaśamaḥ paricchedaḥ

(B. p.278, l. 14 - p.283, l. 2 ; V. p.148, l. 5 - p.149, l. 31):

ārya-Vajradhvajasūtre 'py āha / tadyathāpi nāma sūryo devaputra udayamāno …
… na parittayā pariṇāmanayā tuṣṭir mantavyā ityādi // (ŚS. B. : 65 lines)

〈4〉『大乘集菩薩学論』卷第二十一 増長勝力品第十六之餘

（大正蔵，32卷，130頁 b 20 - 21行）：

「如是聞已。畢竟一心依教而行發願回向。如普賢行經見金剛幢經或十地經中説。」(2行)

ŚS. 16. Bhadracaryāvidhiḥ ṣoḍaśamaḥ paricchedaḥ

(B. p.291, ll. 9 - 10 ; V. p.153, ll. 12 - 13):

pariṇāmanā tu sakalasaṃmāptārya-Bhadracaryayāiva / Vajradhvajapariṇāmanāṃ
vā paśyēt //

athavā Daśabhūmakōktāni mahāprañidhānāni / (ŚS. B. : 3 lines)

筆者は従前より「廻向」およびその一形態としての「代受苦」という概念に関心を懐いており、六十華嚴中「金剛幢菩薩十廻向品第二十一」、八十華嚴中「十廻向品第二十五」をはじめ、『瑜伽師地論』中「菩薩地」、『大智度論』等の大乘經典および論書における「廻向」と「代受苦」の用例を探していた。その一環として『大乘集菩薩学論』を繙いたので、そこに言及され引用されている「金剛幢經」「金剛幢廻向」とは華嚴經「十廻向品」のことであろうと見当はついていた。

ところが実際にそれらを読み比べてみると、両者が漠然と同趣旨のことを述べているのは伝わってくるのであるが、きれいに文言が一致する箇所はほとんど見当たらず、いささか戸惑った。それは、華嚴經が各品で扱う事項を十という数に合わせて立論するという構想に拘泥するあまり、十種の廻向を設定してはいても、同工異曲の表現が繰り返されるばかりで、内容的に多様多彩というわけではなく、また第一の廻向から第十の廻向まで低次元から高次元へと修行の段階が漸進的に向上するというような工夫が為されているわけでもない、冗長で重複の多い記述で溢れていることに一因があるように思われる。

「十廻向品」における十種の廻向は、「十地品」における十の階梯ほどには説得力を持たない。現行の大部の華嚴經が形成される過程において、別行単本の「十地經」が十地品として華嚴經に編入された際には大きな意味を持っていたのであろう十という数が、別行の「金剛幢經」も

しくは「金剛幢廻向經」が「金剛幢菩薩十廻向品」または「十廻向品」として華嚴經に編入される際には余計な制約条件となり、それが数合わせのための増広、水増し加工を誘引した結果、まとまりを欠いた現行のような形態に至ったのではなからうか。

シャーンティデーヴァ（寂天）は『シクシャーサムツチャヤ』（『大乘集菩薩学論』）を編著するに当たり、菩薩の行なう廻向に関する記述の典拠、教証として「金剛幢經」もしくは「金剛幢廻向」という題名の別行經典に多くを依拠して引用したのであるが、その經典は増広されて華嚴經に編入されたものとは異なり、過剰な表現や反復は抑えられ、それによりかえって発想の豊かさ新鮮さが引き立つこととなり、また適度な分量であったかと思われる。このような仮説を検証するためには、梵本『シクシャーサムツチャヤ』中の「金剛幢經」からの引用箇所を全文を翻訳すると共に、その漢訳『大乘集菩薩学論』の当該箇所と六十華嚴「金剛幢菩薩十廻向品」および八十華嚴「十廻向品」の相当箇所を比較対照する必要がある。これについては大体的見当がついているのであるが、紙幅の都合で割愛する。

本稿では、このように思案する契機となった「代受苦」についての記述を『シクシャーサムツチャヤ』中に求めたいと思う。それに先立ち次節において、華嚴經十廻向品における記述をもとに「代受苦」という概念について略述しておこう。

3. 華嚴經 十廻向品に見られる「代受苦」の位置づけ

大本華嚴經すなわち『大方廣佛華嚴經』漢文全訳には、六十巻から成る旧訳の六十華嚴と、八十巻から成る新訳の八十華嚴との二本がある。六十華嚴すなわち佛馱跋陀羅（*Buddhabhadra, 359-429年）訳『大方廣佛華嚴經』六十巻中「金剛幢菩薩十廻向品第二十一」（大正蔵，9巻，488頁a-541頁c）、および八十華嚴すなわち實叉難陀（*Śikṣānanda, 652-710年）訳『大方廣佛華嚴經』八十巻中「十廻向品第二十五」（大正蔵，10巻，124頁a-178頁b）は、兜率天宮（Tuṣita-bhavana）において金剛幢（Vajradhvaja）菩薩（bodhisattva）が説主となり、菩薩摩訶薩の行なう十種の廻向について説く品（章）である。

十廻向とは、六十華嚴によれば下記の十種の廻向である。八十華嚴において訳語が異なる場合には（ ）内に付記する。

- 一、救護一切衆生離衆生相廻向。
- 二、不壞廻向。
- 三、等一切佛廻向。
- 四、至一切處廻向。
- 五、無盡功德藏廻向。
- 六、隨順平等善根廻向（入一切平等善根廻向）。
- 七、隨順等觀一切衆生廻向（等隨順一切衆生廻向）。

八、如相廻向（真如相廻向）。

九、無縛無著解脱廻向。

十、法界無量廻向（入法界無量廻向）⁽¹⁰⁾。

このうち、第一「救護一切衆生離衆生相廻向」は「救護一切衆生」と「離衆生相」の二局面から成る。ただし、前段と後段との間には両局面をつなぐ過渡的漸進的段階があることも想定されているようである。

まず、前段の「一切衆生を救護する」廻向の局面では、偉大な菩薩（菩薩摩訶薩）は布施（檀）持戒（尸）忍辱（辱提）精進（毘梨耶）静慮（禪）般若（智慧）の六波羅蜜行を実践し、大慈大悲大喜大捨（慈哀愍悲歎悦喜堪忍捨）の四無量心を以て修行を積み重ねた上で、「願わくは、自らの修習した無量の善根が一切衆生にとって有益なものとなりますように。皆を究極的に清浄な境地に至らしめ、地獄餓鬼畜生閻羅王等の無量の苦悩を除去消滅させ、それらの苦から永く離れさせますように」と思念する⁽¹¹⁾。

またさらに、偉大な菩薩は、「私はこの善根を廻向することにより、一切衆生の諸々の苦悩の集まりを消滅させるために彼らの家となろう。一切衆生を煩惱から解脱させるために彼らの護衛となろう。一切衆生を恐怖から離れさせるために彼らの避難所となろう。一切衆生を悟りの境地（一切智地）に至らせるために彼らの行く先（趣）をもたらしめものとなろう。一切衆生に究極的な安穩の境地（究竟安隱處）を得させるために彼らに安穩をもたらしめものとなろう。一切衆生の愚かさを減して智慧の光を得させるために彼らにとっての大きな明知をもたらしめものとなろう。一切衆生の無知蒙昧の闇を消滅させるために彼らの炬火となろう。一切衆生を究極的な清浄な境地に安住させるために彼らの燈明となろう。一切衆生を方便の法に入らせるために彼らを導く者となろう。一切衆生に融通無礙の清浄な智（無碍淨智身）を得させるために彼らの主宝臣・大導師となろう」と思念する⁽¹²⁾。このようにして、菩薩の決意表明、乃至は誓願の形で、第一の廻向の具体的な在り方が示されている。そのうちの前半は「救護一切衆生」の様相を呈しており、後半に向けて次第に「離衆生相」の色彩が濃厚になって行く。

そうして、後段の「衆生の相を離れる」廻向の局面に至って、偉大な菩薩は、自分自身が衆生の陥りがちな世間的な価値観を離れているのは当然のことであるが、それ以上に他者に向けて自らの善根を廻向することにより、世間的な苦悩に捕らわれている一切衆生を、その世間的な在り方から出離させて、出世間的な究極的な悟りの境地（究竟一切智）へと趣かせることになる⁽¹³⁾。

中国華嚴学における「三種廻向」という区分を用いるならば、前段の「救護一切衆生」は三種廻向のうちの「衆生廻向」すなわち衆生を救済するための廻向の典型例である。後段の「離衆生相」は「實際廻向」すなわち存在の究極的な在り方（實際）たる出世間的な眞実の理法へと向かわせる廻向、あるいは「菩提廻向」すなわち善根を世間的な果報ではなく出世間的な菩

提（悟り）を達成するために差し向ける廻向に相当するであろう。なお筆者は、前者を方向転換の廻向（B型）、後者を質的転換の廻向（A型）という仮称を以て二分することを提案している⁽¹⁴⁾。

さて、この第一の廻向「救護一切衆生離衆生相廻向」の前段「救護一切衆生」廻向について例示する箇所において、「代受苦」という行為が提示されている。「代受苦」すなわち「代わりに苦を受ける」とは、本来ならば因果応報の縁起の理法により他者が悪業の報いとして引き受けざるを得ないはずの「苦を」、或る者が他者の「代わりに」他者の身代わりとなって「受ける」ことである。その或る者、代受苦の行為主体とは、菩薩摩訶薩、菩薩大士、すなわち偉大な菩薩に他ならない。この「代受苦」が、菩薩の行なう利他行の最たるものとして、偉大な菩薩にしか成し遂げ得ない特殊な利他的行為として、称揚されているのである。

「代受苦」とは如何なる行為なのであろうか。六十華嚴および八十華嚴の次の箇所に、代受苦の様相およびその行為主体たる菩薩の心情あるいは意志が具体的に描かれている。

六十華嚴、卷第十四 金剛幢菩薩十廻向品（大正蔵，9巻，489頁b20行～490頁a3行）。

八十華嚴、卷第二十三 十廻向品（大正蔵，10巻，125頁b27行～126頁a8行）。

別稿にて、当該箇所の現代語試訳を付してその内容を紹介した⁽¹⁵⁾。本稿では次節において、そのうちの『大乘集菩薩学論』に引用されている「金剛幢経」の内の相当箇所を見てみることにしよう。

4. 『大乘集菩薩学論』に見られる「代受苦」に関する記述

前々節（2. 『大乘集菩薩学論』に引用される「金剛幢経」）において4箇所挙げたうちの、
〈3〉『大乘集菩薩学論』卷第二十 増長勝力品第十六

（大正蔵，32巻，128頁b18行～129頁a14行）：

「如金剛幢経説。如日天子出現世間独一無侶。所歴境界而無退転。……
…… 不待他請而方救護。無少善根而不回向。以諸衆生而為莊嚴。」（56行）

ŚS. 16. Bhadracaryāvidhiḥ ṣoḍaśamaḥ paricchedaḥ

（B. p.278, l. 14 - p.283, l. 2 ; V. p.148, l. 5 - p.149, l. 31）:

ārya-Vajradhvajasūtre 'py āha / tadyathāpi nāma sūryo devaputra udayamāno …
… na parittayā pariṇāmanayā tuṣṭir mantavyā ityādi // （ŚS. B. : 65 lines）⁽¹⁶⁾

という箇所の中に、前節で触れた華嚴経十廻向品の「代受苦」に関する記述に相当する部分が見出される。『大乘集菩薩学論』のこの第16章は、菩薩の増長勝力（bhadra-caryā-vidhi）すなわち行動様式・行動規範・行動力がきわめて優れていること（bhadra）、究極の域に達していること（pāramitā 波羅蜜多、到彼岸）を主題としている。このような文脈で「金剛幢経（Vajradhvaja-sūtra）」からの引用文の前半部分（ŚS. B. p.278, l. 14 - p.281, l. 10 ; ŚS. V. p.148, l. 5

- p.149, l.5: 『大乘集菩薩學論』大正藏, 32卷, 128頁 b 18 - c 24行) に「代受苦」に関する記述が含まれているのである。

以下に、この引用箇所〈3〉を幾つかの段落に分けて、梵本『シクシャーサムッチャヤ』〈3 - [] -SS〉、漢訳『大乘集菩薩學論』〈3 - [] -学〉、その出典と思われる、六十華嚴〈3 - [] -六〉、八十華嚴〈3 - [] -八〉における相当箇所を並べ示し、特に「代受苦」に関する記述については現代語訳試を付す。これら4本を比較対照することにより、各文献相互の関係性も見えてくるであろう。

下記の現代語訳文中、[] 内は、原文において省略されている部分を補完するために、語句を補足した部分、補足的説明である。() 内は、原文の直訳を旨とする訳文では伝わりにくい文意を明確にするために、原語、漢訳術語、現代語での言い換え、本翻訳者による文意の解釈、解説などを記した、同義的説明である。梵本『シクシャーサムッチャヤ』(Śikṣāsamuccaya) の底本としてはバンドール校訂本 ŚS. B. を用いるが、ヴァイディヤ本 ŚS. V. の頁数と行数も() 内に付記しておく⁽¹⁷⁾。

〈3-1-SS〉 ŚS. B. p.278, l.14 - p.279, l.8 (ŚS. V. p.148, ll.5-8):

ārya-Vajradhvaja-sūtre 'py āha / tad yathāpi nāma sūryo devaputra udayamāno na tiṣṭhati ,
jāty-andha-doṣeṇa , na tiṣṭhati gandharva-nagara-doṣeṇa , na tiṣṭhati catur-dvīpa-loka-dhātu-
bhūmi-rajo-doṣeṇa , na tiṣṭhati rāhva-surendra-doṣeṇa , na tiṣṭhati dhūma-maṇḍala-doṣeṇa ,
na tiṣṭhati jambū-dvīpa-kleśa-doṣeṇa , na tiṣṭhati nānā-chāyā-doṣeṇa , na tiṣṭhati viṣama-
parvata-doṣeṇa /

〈3-1-学〉『大乘集菩薩學論』増長勝力品第十六（大正藏, 32卷, 128頁 b 18-23行）:

如金剛幢經說。如日天子出現世間獨一無侶。所歷境界而無退轉。於生盲者不生厭患。於羅睺阿修羅王不生厭患。於乾闥婆城不生厭患。於閻浮提方處穢惡不生厭患。於四天下地界微塵不生厭患。於諸高山煙雲等障皆無厭患。

〈3-1-六〉『大方廣佛華嚴經』（六十華嚴）卷第十四（大正藏, 9卷, 489頁 a 3-6行）:

譬如日天子出普照天下。不以盲人故隱而不現。又復不以乾闥婆城四域塵噓。阿修羅障閻浮樹蔭及餘山障。如是等類無量障蔽故。隱而不現。

〈3-1-八〉『大方廣佛華嚴經』（八十華嚴）卷第二十三（大正藏, 10卷, 125頁 a 11-15行）:

譬如日天子出現世間。不以生盲不見故。隱而不現。又復不以乾闥婆城。阿修羅手。閻浮提樹。崇巖邃谷。塵霧煙雲。如是等物之所覆障故。隱而不現。亦復不以時節變改故。隱而不現。

〈3-2-SS〉 ŚS. B. p.279, ll.3-5 (ŚS. V. p.148, ll.8-10):

evam eva bodhisatvo mahāsatvaḥ smṛti-saṃprajanya-vipula-gambhīra-cetā adina-satvo
guṇa-caryā-jñāna-caryāvasānaṃ yāvan^na vivartate satva-drauhilya-doṣaiḥ , na vipravasati

kuśala-mūla-pariṇāmaiḥ /

〈3-2-学〉『大乘集菩薩学論』增長勝力品第十六（大正藏，32卷，128頁b 23-25行）：
菩薩摩訶薩出現世間亦復如是。以無分別智正念了知。若為衆生之所損害。不生厭患心無退轉。
若於菩薩廣大善根而生嫉妬。菩薩於彼不生厭患心無退轉。

〈3-2-六〉『大方廣佛華嚴經』（六十華嚴）卷第十四（大正藏，9卷，489頁a 6-11行）：
菩薩摩訶薩亦復如是。常正憶念未曾散亂。深広安諦心無憂感。正意思惟。悉欲究竟功德智慧。
清浄法光普照世間。示眞實義。淨修一切諸法智門。為諸衆生常修善根。一切衆生有無量惡。

〈3-2-八〉『大方廣佛華嚴經』（八十華嚴）卷第二十三（大正藏，10卷，125頁a 15-19行）：
菩薩摩訶薩亦復如是。有大福德。其心深広。正念觀察。無有退屈。為欲究竟功德智慧。於上勝
法。心生志欲。法光普照。見一切義。於諸法門。智慧自在。常為利益一切衆生。而修善法。

〈3-3-ŚS〉 ŚS. B. p.279, l.5 - p.280, l.2 (ŚS. V. p.148, ll. 10-13):

satva-dṛṣṭi-kāluṣya-doṣair na vivartate / satva-kṣobha-cetobhir na dūrībhavati /

satva-vinaṣṭa-saṃtatyā bodhi-saṃnāhaṃ na viṣkambhayati / sarva-jagat-

paritrāṇa-praṇidhānasya satva-kālīka-luṣair na sraṃsanāṃ karoti yāvad

bāla-jana-samavadhānena na nirvidyate para-satva-doṣaiś ca /

tat kasya hetoḥ / anāvāraṇa-maṇḍalam etad udayati , yad uta sarva-jagad-viśuddhi-vinayāya

/ pe (peyālam) //

〈3-3-学〉『大乘集菩薩学論』增長勝力品第十六（大正藏，32卷，128頁b 25行-c 4行）：
若復衆生為邪見垢之所染汚。菩薩於彼不生厭患心無退轉。若見衆生常為瞋恚之所纏縛。菩薩於
彼亦不遠離。若見衆生愚癡覆障煩惱垢重。而復破壞菩提種子。一切世間無能救護。菩薩於彼不
生輕慢。

何以故。菩薩大悲不見衆生有過失故。猶如日輪出現世間。皆令明顯無有障障。

〈3-3-六〉『大方廣佛華嚴經』（六十華嚴）卷第十四（大正藏，9卷，489頁a 11-18行）：
菩薩摩訶薩。不為惡衆生故。嫌恨退没不行廻向。不以難調伏衆生故退捨善根不行廻向。
雖有衆生邪見瞋濁。於大莊嚴其心不轉。不捨大願救護衆生。若見衆生濁惡無信不知報恩。
修習菩提未曾懈廢。若與愚癡童蒙其事。心無憂惱。

何以故。我以明浄圓滿慧日。出於世間。清浄調伏一切衆生。

〈3-3-八〉『大方廣佛華嚴經』（八十華嚴）卷第二十三（大正藏，10卷，125頁a 19-26行）：
曾不誤起捨衆生心。不以衆生其性弊惡。邪見瞋濁。難可調伏。便即棄捨。不修廻向。但以菩薩。
大願甲冑。而自莊嚴。救護衆生。恒無退轉。不以衆生。不知報恩。退菩薩行。捨菩薩道。不以
凡愚。共同一處。捨離一切如實善根。不以衆生。數起過惡。難可忍受。而於彼所。生疲厭心。
何以故。譬如日天子。不但為一事故。出現世間。

以下が「代受苦」に関する記述（太字で示す）を含む箇所である。適宜、和訳を付記する。

〈3-4-ŚŚ〉 ŚŚ. B. p.280, ll. 2-7 (ŚŚ. V. p.148, ll. 13-18):

yaś ca teṣāṃ sarva-satvānāṃ duṣkha-skandho vividhaṃ cāvaraṇīyaṃ karma samutthitam
yena te āvaraṇīyena karmaṇā buddhā^{na} paśyanti, dharmāṃ na śṛṇvanti, saṃghaṃ na
jānanti / tad **ahaṃ teṣāṃ** tri-vidhaṃ āvaraṇīyaṃ karmōpacitaṃ **duṣkha**-skandhena
svakena śarīreṇōpādādāmi tāsu tāsu narakōpapattiṣv apāya-bhūmiṣu saṃvāseṣu ca /
te ca sarva-satvās tataś cyavantām, **ahaṃ** ca **duṣkhōpādānam upādādāmi**, vyavasyāmi
utsahe⁽¹⁸⁾, na nivarte na palāyāmi nōttrasyāmi⁽¹⁹⁾ na saṃtrasyāmi na bibhemi na pratyudāvarte
na viṣidāmi /

〔和訳〕そして、彼ら一切の衆生には苦しみの集まり（苦蘊）があり、また、種々の所覆の（障
害となりうる）業が共に生起せられていて、その所覆の業によって、彼ら（一切の衆生）は諸
仏を見ず、法を聞かず、僧伽を知らない。そこで、私は、彼らの三種類の所覆の業が積み集め
られているところのものを、自らの身体を以て苦しみの集まり（苦蘊）として受け取るのであ
る。それぞれの地獄への往生において、また、諸悪趣の境地にて共に住まう中において。また、
彼ら一切の衆生は、そこから抜け落ちねばならない。そして、私は、苦しみを受け取ることを、
受け取る、決意する、敢えてする、[それを]止めない、逃げない、驚き恐れな、恐れ慄かな
い、怖がらない、引き返さない、意気消沈しない。

〈3-4-学〉『大乘集菩薩学論』増長勝力品第十六（大正蔵, 32巻, 128頁c4-9行）:

若復衆生愚癡所覆。不信諸佛不聞正法不識僧田。自所造作種種苦因。或墮地獄傍生鬼界。是時
菩薩見彼衆生造是業已。心不動乱亦不揀擇無有驚畏。發堅勇心不生退轉。決定代彼受諸苦惱。

〈3-4-六〉『大方廣佛華嚴經』（六十華嚴）卷第十四（大正蔵, 9巻, 489頁b20-26行）:

此菩薩摩訶薩。復作是念。一切衆生造作無量諸不善業。因是業故受無量苦。不見如來。不聞正
法。不識淨僧。此諸衆生。具有無量大惡罪業。應受無量無邊楚毒。我當於彼三惡道中悉代受苦
令得解脫。我當代受無量苦惱。不以苦故其心退轉恐怖懈怠捨離衆生。

〔和訳〕これなる偉大な菩薩（菩薩摩訶薩）は、また次のように思念する。——一切衆生は無
量の不善業（悪業）を造作しており、この業ゆえに、無量の苦を受けており、如來を見ず、正
法を聞かず、浄らかな僧伽を識らない。この諸々の衆生は無量の大悪罪業を具有し、無量無辺
の楚毒（茨のような痛苦の害毒）を受けようとしている。私はかの三惡道（地獄・餓鬼・畜生
界）の中において悉く[衆生の]代わりに苦を受けて[衆生に]解脫を得させよう。私は無量
の苦惱を代わりに受けよう。苦しみゆえに[私の]その心が退転したり恐怖したり懈怠したり
衆生を見捨てたり離れたりすることはない。

〈3-4-八〉『大方廣佛華嚴經』（八十華嚴）卷第二十三（大正蔵, 10巻, 125頁b27-c3行）:

佛子。菩薩摩訶薩。見諸衆生。造作惡業。受諸重苦。以是障故。不見佛。不聞法。不識僧。便
作是念。我當於彼諸惡道中。代諸衆生。受種種苦。令其解脫。菩薩如是。受苦毒時。轉更精勤。

不捨不避。不驚不怖。不退不怯。無有疲厭。

〈3-5-ŚS〉 ŚS. B. p.280, ll. 7-12 (ŚS. V. p.148, ll. 18-22):

tat kasya hetoḥ / avaśyaṃ **nirvāhayitavyo mayā sarva-satvānāṃ bhāro** , nāiṣa mama
kāma-kāraḥ , sarva-satvōttāraṇa-praṇidhāṇaṃ mama / mayā sarva-satvāḥ parimocayitavyā⁽²⁰⁾ ,
mayā sarva-jagat samuttārayitavyaṃ jāti-kāntārāj^jarā-kāntārād^vyādhi-kāntārāc^cyuty-
upapatti-kāntārāt sarvāpatti-kāntārāt sarvāpāya-kāntārāt sarva-saṃsāra-kāntārāt
sarva-drṣṭi-gahana-kāntārāt kuśala-dharma-praṇāśa-kāntārād ajñāna-samutthita-kāntārāt
tad ete mayā sarva-satvāḥ sarva-kāntārebhyaḥ parimocayitavyāḥ /

〔和訳〕それは如何なる理由によるのか。必ずや一切の衆生の重荷が私によって荷負われなければならぬ。これは、私の欲望の為せるわざ（好き好んですること）ではない。私には、一切の衆生を救い上げようという〔次のような〕誓願〔がある〕。私によって、一切の衆生が遍く解脱せられるべきである。私によって一切の世間生類が、生の密林から、老の密林から、病の密林から、死生の密林から、一切の罪科の密林から、一切の悪趣の密林から、一切の生死流転の密林から、一切の難渋な見解の密林（諸悪見難）から、善い教法の壊滅という密林（壊善法難）から、無知の生起という密林（生無智難）から、救い上げられるべきである。かくして、私によってこれらの一切の衆生は、一切の密林（苦難）から、遍く解脱せられるべきである。

〈3-5-学〉『大乘集菩薩学論』増長勝力品第十六（大正蔵, 32巻, 128頁c9-12行）:

所以者何。我當荷負彼諸衆生。乃至世間生老病死苦惱之難。八無暇難。諸輪回難。諸悪見難。壊善法難。生無智難。我當畢竟令脱是難。

〈3-5-六〉『大方廣佛華嚴經』（六十華嚴）卷第十四（大正蔵, 9巻, 489頁b27-29行）:
何以故。我為衆生荷負重擔滿平等願⁽²¹⁾。度脱一切生老病死愁憂苦惱無量諸難。流転生死一切邪見。失諸善法愚癡無智。

〔和訳〕それは何故か。私は衆生のために、重い負担を背負い荷って、「生・老・病・死・愁憂の苦惱、無量の諸苦難、生死を流転すること（輪廻転生）、一切の邪見（誤った見解・教義）、諸の善法の喪失、痴愚にして無智であること」といった、それら一切〔の苦とその原因〕から〔衆生を〕脱け出し超え渡る（度脱）〔ことをさせよう〕という〔一切衆生に対して〕平等に〔向けられた〕願いを〔心に〕満たしている（満平等願）〔からである〕。

〈3-5-八〉『大方廣佛華嚴經』（八十華嚴）卷第二十三（大正蔵, 10巻, 125頁c3-6行）:
何以故。如其所願。決欲荷負一切衆生。令解脱故。菩薩爾時。作是念言。一切衆生。在生老病死。諸苦難處。隨業流転。邪見無智。喪諸善法。

〈3-6-ŚS〉 ŚS. B. p.280, ll. 12-15 (ŚS. V. p.148, ll. 22-24):

trṣṇā-jāla-saktā avidyā-nivaraṇāvṛtā bhava-trṣṇā-saṃprayuktāḥ praṇāśa-paryavasānā⁽²²⁾
duṣkha-pañjara-prakṣiptās cāraka-saṃniśritā a-budhāḥ pratijñā-viruddhāḥ saṃśaya-bhūtāḥ

sadāvimatayo 'kṣema-darśinaḥ a-niḥsaraṇa-kuśalā bhavārṇave āvarta-maṇḍalāika-caraṇāḥ /
pe (peyālam) //

〔和訳〕 [一切の衆生は] 渴愛の網に絡めとられており、無明の障礙に覆われており、生存への渴愛に盲従せられており、破滅への思いに纏わりつかれており、苦悩の鳥籠に投げ込まれており、牢獄と一緒に住まわされ、賢明ではなく、[自分の] 主張し約束したことに違背し、疑惑の存在であり、常に承認を得られず、不穏当な知見を有し、出離の善を有さず、生存の海で回転する円球において翻弄されている（一本足でいる）者たち [である]。以下省略（乃至）。

〈3-6-学〉『大乘集菩薩学論』増長勝力品第十六（大正蔵，32巻，128頁c12-14行）：
是諸衆生無明所蔽。愛網所著。有結所縛。諸苦籠繫不生覺了無求出離。常懷疑惑與願相違。於輪回海一向漂没。

〈3-6-六〉『大方廣佛華嚴經』（六十華嚴）卷第十四（大正蔵，9巻，489頁b29-c5行）：
我當悉度免此衆苦。衆生常為愛網所纏。無明覆蔽染著有愛。為之走使不得自在。縛在苦獄隨諸魔業。於諸佛所心生疑惑。不得出世道。不見安隱處。常馳無量生死曠野。受無量苦。

〔和訳〕 私はこれら諸々の苦を悉く免れ超え渡ろう。衆生は常に、渴愛に纏わりつかれており、無明に覆われ、生存に対する渴愛（有愛）に汚染され執着せられており、このためにあがき走り回っていて、自由を得ることなく、束縛されて苦しい獄中に在り、諸々の魔の業に従って、諸佛に対して疑惑の心を生じ、出世間の道を得ず、安穩の境地を見ず、常に無量の生死の曠野を馳せて、無量の苦を受けている。

〈3-6-八〉『大方廣佛華嚴經』（八十華嚴）卷第二十三（大正蔵，10巻，125頁c6-10行）：
我應救之。令得出離。又諸衆生。愛網所纏。癡蓋所覆。染著諸有。隨逐不捨。入苦籠檻。作魔業行。福智都盡。常懷疑惑。不見安隱處。不知出離道在於生死輪轉不息。諸苦淤泥恒所沒溺。

梵本『シクシャーサムッチャヤ』ではこのあと「金剛幢經」の引用を一部省略することを記号 (pe) で示しているが、『大乘集菩薩学論』では「乃至」との断り書きもなく「…於輪回海一向漂没。我當安住一切智王。…」と繋げて引用している。その省略部分、〈3-6-六〉、〈3-6-八〉と〈3-7-六〉、〈3-7-八〉の間の中略部分〈3-φ〉を現行の大本華嚴經「十廻向品」（大正蔵所載）により補って示せば、次の通りである。

〈3-φ-ŚS〉 ŚS. B. (ŚS. V.): nil

〈3-φ-学〉『大乘集菩薩学論』増長勝力品第十六（大正蔵，32巻）：該当箇所無し

〈3-φ-六〉『大方廣佛華嚴經』（六十華嚴）卷第十四（大正蔵，9巻，489頁c5-10行）：
菩薩摩訶薩。見彼衆生没生死泥受衆楚毒。起大悲心。饒益衆生令得善利。免度苦難。善根廻向。以大廻向廻向。如三世菩薩廻向。如諸佛所說大廻向經廻向。令一切衆生悉得清淨。具足善根⁽²³⁾究竟一切智。

〔和訳〕 偉大な菩薩は、かの衆生が生死の泥中に没して楚毒を受けているのを見て、大悲の心

を起こし、衆生に善い利益を得させ、苦難を免れさせ超え渡らせる。[この菩薩の] 善根の廻向は、大廻向による廻向であり、三世（過去・現在・未来）の菩薩による廻向と同様であり、諸佛の説くところの「大廻向経」にあるとおりの廻向であり、一切衆生に悉く清浄なることを得させ、善根を具足させ、究竟の一切智（無上正等覺）[を成就させる]。

〈3-φ-八〉『大方廣佛華嚴経』（八十華嚴）卷第二十三（大正蔵, 10巻, 125頁c 10-14行）：菩薩見已。起大悲心。大饒益心。欲令衆生。悉得解脫。以一切善根廻向。以廣大心廻向。如三世菩薩。所修廻向。如大廻向経所説廻向。願諸衆生。普得清浄。究竟成就一切種智。

以上、「金剛幢経」すなわち華嚴経「十廻向品」のこの部分は『シクシャーサムッチャヤ』および『大乘集菩薩学論』では割愛されているが、「起大悲心」「大廻向経」等の注目すべき語句の見られる箇所である。

それでは、『シクシャーサムッチャヤ』および『大乘集菩薩学論』の「金剛幢経」引用箇所に戻ろう。

〈3-7-ŚS〉 ŚS. B. p.280, ll. 15-18 (ŚS. V. p.148, ll. 25-27):

sarva-satvānām anuttara-jñāna-rājya-pratiṣṭhāpanārtham ahaṃ carāmi / nāhaṃ kevalam ātma-parimocanābhīyuktaḥ / sarva-satvā hy ete mayā sarva-jñātā-citta-plavena saṃsāra-durgād uddhartavyā , mahā-prapātād abhyutkṣeptavyāḥ / sarvôpadravebhyaḥ parimocayitavyāḥ , saṃsāra-srotasaḥ pratārayitavyā ⁽²⁴⁾ātmanā mayā sarva-satva-duṣkha-skandho 'dhyavasitaḥ /

〔和訳〕一切の衆生に無上の智の王国を確立させるために、私は行動する。私はただ単に自分の解脱に専心する者ではない。というのも、これら一切の衆生は、一切智者性を心に浮かべている私によって、行き難い生死流転から引き上げられるべき者たちであり、巨大な滝から引き上げられるべき者たちであり、一切の諸々の災難から全き解放されるべき者たちであり、生死流転の暴流から救い渡らせられるべき者たちなのである。この私自身によって、一切の衆生の苦の集積（苦蘊）が**決着せられている**のである。

〈3-7-学〉『大乘集菩薩学論』増長勝力品第十六（大正蔵, 32巻, 128頁c 14-17行）：我當安住一切智王。令諸衆生成就義利皆得解脫。唯我一人能為救護。假使一切世界悉為惡趣。受苦衆生充滿其中。

〈3-7-六〉『大方廣佛華嚴経』（六十華嚴）卷第十四（大正蔵, 9巻, 489頁c 10-13行）：復作是念。我當悉令一切衆生得無上智王。安隱住處。不為自度。但欲令彼出生死淵。得一切智心。拔出衆生惡道嶮谷。救無量苦度生死流。

〔和訳〕また、[この偉大な菩薩は] 次のように思念する。——私は悉く一切衆生に無上の智の王という安穩な住處（菩提）を得させよう。[私は] 自ら [菩提へと] 超え渡ることはしない。ただ、彼ら（衆生）を生死という淵から脱け出させ、[衆生に] 一切智への心（菩提心）を得さ

せ、衆生に悪道（悪趣）という峻谷を脱け出させ、無量の苦から救い、生死の流れを超え渡らせることを〔私は〕欲している。

〈3-7-八〉『大方廣佛華嚴經』（八十華嚴）卷第二十三（大正藏，10卷，125頁c14-18行）：復作是念。我所修行。欲令衆生。皆悉得成無上智王。不為自身。而求解脫。但為救濟一切衆生。令其咸得一切智心。度生死流。解脫衆苦。

〔和訳〕また、〔この偉大な菩薩は〕次のように思念する。——私が修行しているのは、衆生皆に悉く無上の智の王を得させたいと欲するからであり、自身の為にはではない。そうして、解脫を求めているが、それはただ、一切衆生を救済する為に、それ（一切衆生）に一切智者（覺者）の心を得させて、生死流轉の流れを渡らせて、もろもろの苦から解脫させたいからなのである。

〈3-8-ŚS〉 ŚS. B. p.280, l.18 - p.281, l.2 (ŚS. V. p.148, ll.28-30):

yāvad utsahe 'haṃ sarvāpāyeṣu sarva-loka-dhātu-paryāpneṣu sarva-duṣkha-vāsam anubhavitum / na ca mayā sarva-satvāḥ kuśala-mūlair vañcītvayāḥ / vyavasyāmy aham ekaikasminn apāye 'parānta-koṭi-gatān kalpān saṃvasayitum , yathā cāikāpāye tathā sarvāpāya-niravaśeṣa-sarva-loka-dhātu-paryāpneṣu sarva-satva-parimocana-nidānam /

〔和訳〕私は、一切の悪趣における、一切の世界の悲惨な境遇における、一切の苦の住居となる（苦を持続的に経験する）ことに堪えうる。また、そうである限りは、一切の衆生が、私により、諸々の善根により、欺かれるようなことはありえない（必ずその恩恵を受ける）。私は、個々の悪趣に、未来永劫（尽未来際劫）、共に住むことを決心している。また、個々の悪趣におけると同様に、一切の悪趣および余す所なく一切の世界の悲惨な境遇における、一切の衆生を解脫させることの原因〔となることに私は堪えうる〕。

〈3-8-学〉『大乘集菩薩学論』増長勝力品第十六（大正藏，32卷，128頁c17-19行）：

以我所集一切善根。平等迴向無不與者。乃至最後邊際所經時分。一一惡趣消滅無餘。一一衆生皆得解脫。

〈3-8-六〉『大方廣佛華嚴經』（六十華嚴）卷第十四（大正藏，9卷，489頁c13-18行）：復作是念。我當為一切衆生受無量苦。令諸衆生悉得免生死沃焦。我當為一切衆生。於一切刹一切地獄中。受一切苦。終不捨離。我當於一一惡道盡未來劫。代諸衆生受無量苦。

〔和訳〕また、〔この偉大な菩薩は〕次のように思念する。——私は一切衆生のために無量の苦を受けて、諸々の衆生を悉く生死という沃焦（肥沃な焦土）から免れさせよう。私は一切衆生のために、一切の国土、一切の地獄の中において、一切の苦を受けて、最後まで〔一切の苦を〕捨離しないでおう。私は悪道の一々において未来の劫の尽きるまで、諸々の衆生に代わって無量の苦を受けよう。

〈3-8-八〉『大方廣佛華嚴經』（八十華嚴）卷第二十三（大正藏，10卷，125頁c18-21行）：

復作是念。我當為一切衆生。備受衆苦。令其得出無量生死。衆苦大壑。我當普為一切衆生。於一切世界。一切惡趣中。盡未來劫。受一切苦。然常為衆生。勤修善根。

〔和訳〕また、[偉大な菩薩は] 次のように思念する。——私は一切衆生のために諸々の苦をつぶさに受けて、[一切衆生に] その無量の生死から、諸々の苦の大壑（堀・溝）から出ることを得させよう。私はあまねく一切衆生のために、一切の世界、一切の悪趣の中において、未来の劫の尽きるまで、一切の苦を受けよう。そうして、常に衆生のために善根を修め勤めよう。

〈3-9-SS〉 ŚS. B. p.281, II. 3-6 (ŚS. V. p.148, II. 30-33):

tat kasya hetoḥ / varam khalu punar aham eko duṣkhiṭaḥ syāṃ , na cēme sarva-satvāḥ
apāya-bhūmi-prapatitāḥ / mayā tatrātmā⁽²⁵⁾ bandhako dātavyaḥ / sarva-jagac^{ca} niḥkretavyaṃ⁽²⁶⁾
naraka-tiryag-yoni-yama-loka-kāntārād⁽²⁷⁾ ahaṃ ca sarva-satvānām arthāya sarva-duṣkha-
vedanā-skandham anena svakena śārīreṇ⁽²⁸⁾ānubhaveyam / sarva-satva-nidānam

〔和訳〕それは如何なる理由によるのか。兎も角も、これら一切の衆生が悪趣の地に陥ってしまうよりも、私一人が苦しみを受ける者となりうることの方が、むしろよいことなのである。私自身によって、そこ（悪趣の地）において、束縛するもの（補足者、拘束具）が〔私に〕与えられる（私が束縛され人質になる）べきであり、そして、一切の世間生類が、奈落や畜生の胎内や閻魔の世界（地獄・畜生・餓鬼界）という險難処〔に人質として囚われの身となっている状態〕から買い戻されるべきなのである。そして、私は、一切の衆生の利益の為に〔彼らの〕一切の苦の感受の集積を、この自らの身体を以て経験しよう。〔そして〕一切の衆生〔を解脱させる〕原因〔となろう〕。

〈3-9-学〉『大乘集菩薩学論』増長勝力品第十六（大正蔵，32巻，128頁c 19-20行）：
若使一人未離苦者。我當以身質而出之。

〈3-9-六〉『大方廣佛華嚴經』（六十華嚴）卷第十四（大正蔵，9巻，489頁c 18-20行）：
何以故。我寧獨受諸苦。不令衆生受諸楚毒。當以我身免贖一切惡道衆生。令得解脱。

〔和訳〕それは何故か。私が独りで諸々の苦を受けたならば、衆生に諸々の楚毒を受けさせないで済むのだから。〔私は〕我が身を以て、悪道にいる一切の衆生を免じ贖い、〔衆生に苦からの〕解脱を得させよう。

〈3-9-八〉『大方廣佛華嚴經』（八十華嚴）卷第二十三（大正蔵，10巻，125頁c 21-24行）：
何以故。我寧獨受如是衆苦。不令衆生墮於地獄。我當於彼地獄畜生。閻羅王等。險難之處。以身為質。救贖一切惡道衆生。令得解脱。

〔和訳〕それは何故か。私が独りでそのような諸々の苦を受けたならば、衆生を地獄へと墮させずに済むのだから。私はかの地獄や畜生界や閻羅王等の險難の場所において、身を質と為して、悪道にいる一切の衆生を救い贖い、〔苦からの〕解脱を得させよう。

〈3-10-ŚS〉 ŚS. B. p.281, ll. 6-7 (ŚS. V. p.148, l. 30 - p.149, l. 1):

ahaṃ ca sarva-satvānāṃ prātibhāvyam utsahe satya-vādī pratyayito 'viśaṃvādakaḥ /
na ca mayā sarva-satvāḥ parityaktāḥ /

〔和訳〕そして、私は、一切の衆生にとっての、信頼の置ける、無謬なる、真実を語る者であり、保証人となることに堪えうる。また、一切の衆生が私によって見放されることはない。

〈3-10-学〉『大乘集菩薩学論』増長勝力品第十六（大正蔵，32巻，128頁c 20-22行）：
願諸衆生因我身故得盡苦際獲安隱樂。各各樂出真實語言。勿相欺誑不生損害。

〈3-10-六〉『大方廣佛華嚴經』（六十華嚴）卷第十四（大正蔵，9巻，489頁c 20-22行）：
菩薩摩訶薩。復作是念。我悉當為一切衆生。作誠實語者。離惱害心不捨衆生。

〔和訳〕偉大な菩薩は、また次のように思念する。——私は悉く一切衆生のために、誠実な言葉遣いをする者となり、人を悩まし害する心を離れ、衆生を見捨てぬようにすべきである。

〈3-10-八〉『大方廣佛華嚴經』（八十華嚴）卷第二十三（大正蔵，10巻，125頁c 25-26行）：
復作是念。我願保護一切衆生。終不棄捨。所言誠實。無有虛妄。

〔和訳〕また次のように思念する。——私は一切衆生を保護することを願う。決して見捨てはしない。〔私の〕言うことは誠実であり、嘘偽りはまったくくない。

〈3-11-ŚS〉 ŚS. B. p.281, ll. 7-10 (ŚS. V. p.149, ll. 2-5):

tat kasya hetoḥ / sarva-satvārambaṇo mama sarva-jñatā-cittōtpāda utpanno yad
utasarva-jagat-parimocanāya / na cāhaṃ rati-kāmatayā 'nuttarāyāṃ samyak-saṃbodhau
saṃprasthito nāpi pañca-kāma-guṇa-raty-anubhavanāya nāpi kāma-viśaya-niṣevanāya /
na cāhaṃ anyonya-kāma-dhātu-paryāpanna-rati-vyūha-samudānayanāya carāmi bodhisatva-
caryāṃ /

〔和訳〕それは如何なる理由によるのか。私には、一切の衆生を所縁とした、一切智者性（悟り）への発心が生起していたのであり、これはすなわち、一切の世間生類を遍く解脱させるためなのである。ただし、私は、快樂への欲望によって無上正等覺に向けて発趣したのではないし、また、五種の欲望（五感官の快感刺激およびその対象に対する欲望）の徳性による快樂を経験するためでもないし、欲望の対象に奉仕するためでもない。また、私は、各別々の欲界に充滿している快樂の大群を掻き集めるために、菩薩行を行なっているわけではない。

〈3-11-学〉『大乘集菩薩学論』増長勝力品第十六（大正蔵，32巻，128頁c 22-24行）：
我當令發一切智心離五欲境行菩薩行。畢竟安住無上正等菩提。

〈3-11-六〉『大方廣佛華嚴經』（六十華嚴）卷第十四（大正蔵，9巻，489頁c 22-24行）：
何以故。我因衆生發菩提心。度脱一切。不求尊貴。不求五欲。不求世間種種樂故。行菩薩道。

〔和訳〕それは何故か。私は衆生に因り、菩提心を発する。一切を超脱して、尊貴を求めず、五欲の充足を求めず、世間の種々の樂を求めないゆえに、菩薩道を実行するのである。

〈3-11-八〉『大方廣佛華嚴經』（八十華嚴）卷第二十三（大正藏，10卷，125頁c 26-28行）：
何以故。我為救度一切衆生。發菩提心。不為自身。求無上道。亦不為求五欲境界。及三有中。
種種樂故。修菩提行。

5. 「代受苦」等に相当するサンスクリット語原語

サンスクリット語での「代受苦」の原語は判然としていなかった。この語およびその類語により示される概念に言及している文献のうち、漢訳と対照可能なサンスクリット語原典が現存するものは少なく、『瑜伽師地論（*Yogācārabhūmi*）』中「菩薩地（*Bodhisattvabhūmi*）」が、期待されるほとんど唯一の資料であるように思われた。そうして、筆者はかつて「菩薩地」中に僅かながら下記のような用例を見出した。

duḥkhodvahanacitta (*duḥkha-udvahana-citta*) [*BBh. D. p.170, ll. 1-2*]

代受苦心〔瑜伽師地論，菩薩地，大正藏，30卷，537a〕

これにより「苦（*duḥkha*）」を「代受すること（*udvahana*）」が「代受苦」の原語として措定される。

また、「代受苦」と明記されていないが、同趣旨の内容を表わしている用例が二例、見出された。

sarvaduḥkhayātanāprakārāṃś cōdvahet [*BBh. D. p.169, ll. 23-24*]

於一切種治罰大苦。為諸有情悉能堪忍〔瑜伽師地論，菩薩地，大正藏，30卷，537a〕

aham utsahāmi *sattvānāṃ duḥkhāpanayanahetoḥ* [*BBh. D. p.253, ll. 20-21*]

亦能忍受。為除一切有情苦故。〔瑜伽師地論，菩薩地，大正藏，30卷，565a〕

この二例のうち前者には *udvahana* という名詞の語源として想定される *ud-√ vah-* という動詞の可能法の定動詞形 *udvahet* (Potential or Optative, 3. sg. P.) が見られる。この語が漢訳では「代受」ではなく「能堪忍」と訳されている。後者は「私は持ち堪える、という。一切衆生の苦を除去するためという理由により。」という内容から、「代受苦」に相当する行為が表明されていると判断しうる用例である。ここに、*ut-√ sah-* という動詞の定動詞形 *utsahāmi* (Indicative Present, 1. sg. P.) が用いられており、この動詞は「支え上げる、持ち堪える」を原義とするので、この語が「忍受」と漢訳されているのはごく自然であり、また「代受」と意味的に重なる⁽³⁰⁾ところがあると思われる。

これらに加えて、前節で見たように『大乘集菩薩学論』『シクシャーサムツチャヤ』に引用された「金剛幢經（*Vajradhvaja-sūtra*）」中、〈3-4-ŚŚ〉、〈3-5-ŚŚ〉、〈3-7-ŚŚ〉、〈3-8-ŚŚ〉、〈3-9-ŚŚ〉に「代受苦」に相当する語の用例が幾つか見出された。対応する漢訳と共に抽出して並べてみよう。

〈3-4-ŚŚ〉 *ahaṃ … duḥkha-skandhena svakena śarīreṇōpādāmi* [*ŚŚ. B. p.280, ll. 4-5*]

; V. p.148, ll. 14–16]

- 〈3-4-ŚS〉 ahaṃ ca duṣkhôpādānam upādadāmi , vyavasyāmi utsahe [ŚS. B. p.280, ll. 5–6 ; V. p.148, ll. 16–17]
- 〈3-4-学〉 是時菩薩…決定代彼受諸苦惱。〔大乘集菩薩學論，大正，32卷，128, c 6–9〕
- 〈3-4-六〉 我當於彼三惡道中悉代受苦令得解脫。我當代受無量苦惱。〔六十華嚴，大正，9卷，489, b 24–26〕
- 〈3-4-八〉 我當於彼諸惡道中。代諸衆生。受種種苦。令其解脫。〔八十華嚴，大正，10卷，125, b 29–c 1〕
- 〈3-5-ŚS〉 avasyaṃ nirvāhayitavyo mayā sarva-satvānām bhāraḥ [ŚS. B. p.280, l. 8 ; V. p.148, l. 18]
- 〈3-5-学〉 我當荷負彼諸衆生。乃至世間生老病死苦惱之難。〔大乘集菩薩學論，大正，32卷，128, c 9–10〕
- 〈3-5-六〉 我為衆生荷負重擔滿平等願。度脫一切生老病死愁憂苦惱〔六十華嚴，大正，9卷，489, b 27–28〕
- 〈3-5-八〉 如其所願。決欲荷負一切衆生。令解脫故。…〔八十華嚴，大正，10卷，125, c 3–6〕
- 〈3-7-ŚS〉 ātmanā mayā sarva-satva-duṣkha-skandho 'dhyavasitaḥ [ŚS. B. p.280, l. 18 ; V. p.148, l. 27]
- 〈3-7-学〉 唯我一人能為救護。…受苦衆生充滿其中。〔大乘集菩薩學論，大正，32卷，128, c 15–17〕
- 〈3-7-六〉 拔出衆生惡道嶮谷。救無量苦度生死流。〔六十華嚴，大正，9卷，489, c 12–13〕
- 〈3-7-八〉 但為救濟一切衆生。…度生死流。解脫衆苦。〔八十華嚴，大正，10卷，125, c 16–18〕
- 〈3-8-ŚS〉 yāvad utsahe 'haṃ sarvāpāyeṣu sarva-loka-dhātu-paryāpanneṣu sarva-duṣkha-vāsam anubhavitum / [ŚS. B. p.280, ll. 18–19 ; V. p.148, l. 28]
- 〈3-8-学〉 以我所集一切善根。…一一惡趣消滅無餘。〔大乘集菩薩學論，大正，32卷，128, c 17–19〕
- 〈3-8-六〉 我當為一切衆生。於一切刹一切地獄中。受一切苦。終不捨離。我當於一一惡道盡未來劫。代諸衆生受無量苦。〔六十華嚴，大正，9卷，489, c 14–18〕
- 〈3-8-八〉 我當為一切衆生。備受衆苦。…我當普為一切衆生。於一切世界。一切惡趣中。盡未來劫。受一切苦。〔八十華嚴，大正，10卷，125, c 18–21〕
- 〈3-9-ŚS〉 varam khalu punar aham eko duṣkhitaḥ syāṃ , na cēme sarva-satvāḥ apāya-bhūmi-prapatitāḥ / [ŚS. B. p.281, ll. 3–4 ; V. p.148, l. 31]

〈3-9-学〉若使一人未離苦者。〔大乘集菩薩学論，大正，32卷，128 c 19-20〕

〈3-9-六〉我寧獨受諸苦。不令衆生受諸楚毒。〔六十華嚴，大正，9卷，489, c 18-19〕

〈3-9-八〉我寧獨受如是衆苦。不令衆生墮於地獄。我當於彼地獄畜生。閻羅王等。陰難之處。〔八十華嚴，大正，10卷，125, c 22-23〕

これら少数の用例からではあるが、ud-√ vah-「運び上げる，持ち堪える」，ut-√ sah- (< ud-√ sah-)「支え上げる，持ち堪える，可能である」，upa-ā-√ dā-「取り上げる，受け取る」という動詞、およびそれに由来する語（udvahana 等）が、対象物を表わす語として duḥkha / duṣkha「苦」等、あるいは手段を表わす語として svakena śarīreṇa「自らの身体を以て」等の語と共に用いられている場合に、「代受苦」に該当する行為が表示されている可能性があると言えるであろう。

「贖い（あがない）」という語が「代受苦」の具体的説明の中で用いられているのが、耳目を引く。

〈3-9-ŚS〉 mayā tatrātmā bandhako dātavyaḥ / sarva-jagac^ca niḥkretavyaṃ naraka-tiryag-yoni-yama-loka-kāntārāt [ŚS. B. p.281, ll. 4-5; V. p.148, ll. 31-32]

〈3-9-学〉我當以身質而出之。〔大乘集菩薩学論，大正，32卷，128, c 20〕

〈3-9-六〉當以我身免贖一切惡道衆生。令得解脫。〔六十華嚴，大正，9卷，489, c 19-20〕

〈3-9-八〉以身為質。救贖一切惡道衆生。令得解脫。〔八十華嚴大正，10卷，125, c 24〕

衆生が自らの作した罪業の報いにより地獄や畜生や餓鬼の境遇で囚われの身になっているときに、菩薩摩訶薩は地獄等に赴き、彼らの身代わりに人質になろう、と願うのである。まさに地獄に佛（菩薩）。菩薩摩訶薩とは、観音菩薩や地藏菩薩などの偉大な菩薩を指すのであろう。さてここで「贖」と漢訳されているところのサンスクリット原語は、niḥkretavyaṃ (nis-√ kri-, Gerundive, N. sg. n.)「買い戻されるべし」である。意外にも、正しく直訳されていたのであった。

6. 小 結

上に、梵本『シクシャーサムッチャヤ』、漢訳『大乘集菩薩学論』、六十華嚴、八十華嚴、これら4本の文献の相互に対応する箇所を並べて見た結果、次のような傾向があることが判明した。

全体的に言えることは、これら4本はつぶさに対応しているわけではない。

漢訳『大乘集菩薩学論』中の「金剛幢經」からの引用文の語彙は六十華嚴より八十華嚴のそれに近い。

漢訳『大乘集菩薩学論』は省略が多く、梵本『シクシャーサムッチャヤ』の抄訳と見做してよい。

梵本の引用文の方が出典の六十華嚴あるいは八十華嚴と内容的によく対応している部分も見受けられる。ただし、その引用文の配列と分量が現行の大本華嚴經と一致しているわけではない。

シャーンティデーヴァ（寂天）は『シクシャーサムッチャヤ』を編著する際に、Vajradhvaja-sūtra「金剛幢經」の梵本を手許に置きながら、かなり恣意的に重要箇所を選び出して引用したのであり、また、彼が参照していた梵本「金剛幢經」は大本華嚴經（六十華嚴、八十華嚴）に編入される以前の、別行単本經典であったものと想像される。

特に「代受苦」に関する記述については、六十華嚴および八十華嚴の当該箇所の大半が、梵本『シクシャーサムッチャヤ』に引用されていることが確認できた。漢訳『大乘集菩薩学論』は、元より幾分杜撰な抄訳である上、訳語の選定も六十華嚴および八十華嚴と異なるため、対応箇所を見出すにはやや困難を伴った。それでも、梵本『シクシャーサムッチャヤ』における「代受苦」に関する記述部分は、六十華嚴「金剛幢菩薩十廻向品」および八十華嚴「十廻向品」中の当該箇所の内容と比較的よく一致していた。そのおかげで、「代受苦」およびそれに関連した漢訳仏教術語のサンスクリット語原語の同定と、華嚴經「十廻向品」中の関連箇所のサンスクリット語原文の回収という、筆者の所期の目的はほぼ果たされた。尊聖シャーンティデーヴァ⁽³¹⁾師が、筆者の乞い求める資料を遥か昔に丁寧に書き写して今に伝えてくれた御蔭である。

目下の課題としては、梵本『シクシャーサムッチャヤ (Śikṣāsamuccaya)』と漢訳『大乘集菩薩学論』中の「金剛幢經」「金剛幢廻向」からの3箇所の引用文のうち、〈1〉、〈2〉、および〈3〉のうちの、今回割愛した部分について現代語訳するとともに、六十華嚴「金剛幢菩薩十廻向品」および八十華嚴「十廻向品」における対応箇所を明らかにしたいところである。

使用文献と略号

- 大正蔵 大正 大正新脩大蔵經 (大正一切經刊行会)
『大乘集菩薩学論』 法護・日称等訳, 二十五卷 (大正蔵, 32卷, No. 1636, 75-145頁)。
六十華嚴『大方廣佛華嚴經』 佛駄跋陀羅訳, 六十卷 (大正蔵, 9卷, No. 278, 395-788頁)。
八十華嚴『大方廣佛華嚴經』 實叉難陀訳, 八十卷 (大正蔵, 10卷, No. 279, 1-444頁)。
四十華嚴『大方廣佛華嚴經』 般若訳, 四十卷 (大正蔵, 10卷, No. 293, 661-850頁)。
菩薩地 『瑜伽師地論』 彌勒菩薩説, 玄奘訳, 卷第三十五-卷第五十 本地分中
菩薩地 第十五 (大正蔵, 30卷, No. 1579, 478-577頁)。
BBh. *Bodhisattvabhūmiḥ*
BBh. D. *Bodhisattvabhūmiḥ* [Being the XVth Section of *Asaṅgapāda's Yogācārabhūmiḥ*],
Edited by Nalinaksha Dutt (Jayaswal Research Institute, Patna, 1978).
BBh. W. *Bodhisattvabhūmi : A Statement of Whole Course of Bodhisattva*
(Being Fifteenth Section of *Yogācārabhūmi*),
Edited by Unrai Wogihara (Taisho College, Tokyo, 1936).
再版: 『梵文菩薩地持經』 (山喜房佛書林)
ŚS. *Śikṣā-samuccaya* of Śāntideva.
ŚS. B. *Çikshāsamuccaya : A Compendium of Buddhistic Teaching Compiled*
by Çāntideva Chiefly from Earlier Mahāyāna-sūtras.
Edited by Cecil Bendall, Bibliotheca Buddhica, Volume I (1897-1902).
ŚS. V. *Śikṣāsamuccaya of Śāntideva (Śāntideva-viracitaḥ Śikṣā-samuccayaḥ),*
Edited by P. L. Vaidya and Sridhar Tripathi, Buddhist Sanskrit Texts, No. 11
(The Mithila Institute of Post-graduate Studies and Research in Sanskrit Learning,
Darbhanga, first edition 1960, second edition 1999).

注記

- (1) Cecil Bendall, *ŚS. B.* (1897-1902), Introduction, § 2. Authorship and date, pp. III - VI.
金倉圓照『悟りへの道』サーラ叢書9 (平楽寺書店, 1965年)「解題」234頁。
『仏典解題辞典』第2版 (春秋社, 1977年) 所収、高崎直道稿「大乘集菩薩学論」の項 (155-156頁)。
- (2) 中野義照「大乘集菩薩学論解題」(『国訳一切經 印度撰述部 瑜伽部十一』大東出版社, 1935年) 1頁。
- (3) 金倉圓照『悟りへの道』(前掲, 1965年)「解題」226-238頁。平川彰『インド仏教史』下 (春秋社, 1979年) 204頁。田村智淳「中観の実践——寂天の『学処要集』」(『講座大乘仏教7 中観思想』春秋社, 1982年, 251-282頁)。
- (4) Cecil Bendall, *ŚS. B.*, Summary, pp. XXXI - XXXVIII; *Karikas of the Çikshāsamuccaya*, pp. XXXIX - KLVII.
中野義照「大乘集菩薩学論解題」(前掲, 1935年) 4-12頁。
- (5) 中野義照「大乘集菩薩学論解題」(前掲, 1935年) 1-2頁。
- (6) 『シクシャーサムッチャヤ』の主題と梗概については、田村智淳「中観の実践——寂天の『学処要集』」(前掲, 1982年) 参照。
- (7) 「金剛幢經」の梵語原名が *Vajradhvaja-sūtra*、「金剛幢廻向」の梵名が *Vajradhvaja-pariṇāmanā* であることを手がかりに『梵和大辞典』を引けば、これが「大方広仏華嚴經金剛幢菩薩十廻向品」を指すと付記されている。荻原雲来編纂、辻直四郎協力、鈴木学術財団編『漢訳対照 梵和大辞典』増補改訂版 (講談社, 1986)

年) 1165頁。この付記は今を遡ること百数十年前に公刊された Cecil Bendall による *Śikṣāsamuccaya* の校訂出版に当たり多大な貢献をした荻原雲来博士ご自身によるものであろう (SS. B. Preface, p. iii*)。

高峯了州『華嚴思想史』改訂版 (百華苑, 1963年) 8頁。

伊藤瑞観『華嚴經の成立——大本の構想内容と集成意図および十地經の位置』(『講座大乗仏教3華嚴思想』春秋社, 1983年) 67頁。伊藤瑞観『増補 華嚴菩薩道の基礎的研究——十地經における菩薩道とその歴史的発展』(国書刊行会, 2013年) 26頁。

木村清孝『中国華嚴思想史』(平楽寺書店, 1992年) 21-22頁。

(8) Cecil Bendall, SS. B., Index 1, p.371, ll. 2-3.

(9) シャーンティデーヴァの思想については、佐々木一憲氏 (現・法華經文化研究所特別所員) による優れた研究がある。特に、『シクシャーサムッチャヤ』第1章「布施波羅蜜多」における「金剛幢經」の引用箇所を扱った研究としては、佐々木一憲「シャーンティデーヴァにおける利他行——同師の著作にみられる布施と廻向、および菩提心の関係について」(『印度学仏教学研究』通巻第117号, 2009年)。

(10) 『大方廣佛華嚴經』(六十華嚴) 卷第十四 (大正藏, 9卷, 488頁 b 24-c 4行) :

佛子。何等為菩薩摩訶薩廻向。菩薩摩訶薩廻向有十。去來今佛悉共演說。何等為十。
一者救護一切衆生離衆生相廻向。二者不壞廻向。三者等一切佛廻向。四者至一切處廻向。
五者無盡功德藏廻向。六者隨順平等善根廻向。七者隨順等觀一切衆生廻向。八者如相廻向。
九者無縛無著解脫廻向。十者法界無量廻向。三世諸佛所共演說。

『大方廣佛華嚴經』(八十華嚴) 卷第二十三 (大正藏, 10卷, 124頁 c 1-8行) :

佛子。菩薩摩訶薩。廻向有十種 三世諸佛。咸共演說。何等為十。一者救護一切衆生離衆生相廻向。
二者不壞廻向。三者等一切佛廻向。四者至一切處廻向。五者無盡功德藏廻向。六者入一切平等善根廻向。
七者等隨順一切衆生廻向。八者真如相廻向。九者無縛無著解脫廻向。十者入法界無量廻向。

(11) 『大方廣佛華嚴經』(六十華嚴) 卷第十四 (大正藏, 9卷, 488頁 c 4-12行) :

佛子。何等為救護一切衆生離衆生相廻向。此菩薩摩訶薩。行檀波羅蜜。淨尸波羅蜜。修辱提波羅蜜。
行毘梨耶波羅蜜。入禪波羅蜜。分別般若波羅蜜。修行積集慈哀悲愍歡喜堪忍捨。修如是等無量善根。
修善根已。作如是念。我所修習善根。悉以饒益一切衆生究竟清淨。以此所修善根。
令一切衆生皆悉除滅地獄餓鬼畜生閻羅王等無量苦惱。

『大方廣佛華嚴經』(八十華嚴) 卷第二十三 (大正藏, 10卷, 124頁 c 12-18行) :

佛子。云何為菩薩摩訶薩救護一切衆生離衆生相廻向。佛子。此菩薩摩訶薩。行檀波羅蜜。淨尸波羅蜜。修辱提波羅蜜。起精進波羅蜜。入禪波羅蜜。住般若波羅蜜。大慈大悲。大喜大捨。修如是等無量善根。修善根時。作是念言。願此善根。普能饒益一切衆生。皆使清淨。至於究竟。永離地獄。餓鬼畜生。閻羅王等。無量苦惱。

(12) 『大方廣佛華嚴經』(六十華嚴) 卷第十四 (大正藏, 9卷, 488頁 c 12-22行) :

復作是念。我以此善根廻向。為一切衆生作舍。令滅苦陰故。為一切衆生作護。令解脫煩惱故。為一切衆生作歸。令離恐怖故。為一切衆生作趣。令至一切智地故。為一切衆生作安隱。令得究竟安隱處故。為一切衆生作大明。令滅癡冥得慧光故。為一切衆生作炬。令滅無明闇故。為一切衆生作燈。令得安住究竟明淨故。為一切衆生作導。令入方便法故。為一切衆生主寶臣。令得無礙淨智身故。

『大方廣佛華嚴經』(八十華嚴) 卷第二十三 (大正藏, 10卷, 124頁 c 18-28行) :

菩薩摩訶薩。種善根時。以己善根。如是廻向。我當為一切衆生作舍。令免一切諸苦事故。為一切衆生作護。悉令解脫諸煩惱故。為一切衆生作歸。皆令離諸怖畏故。為一切衆生作趣。令得至於一切智故。為一切衆生作安。令得究竟安隱處故。為一切衆生作明。令得智光滅癡暗故。為一切衆生作炬。破彼一切無明闇故。為一切衆生作燈。令住究竟清淨處故。為一切衆生作導師。引其令入真實法故。為一切衆生作大導師。與其無礙大智慧故。

- (13) 『大方廣佛華嚴經』（六十華嚴）卷第十四（大正蔵，9巻，488頁c22-24行）：
 佛子。菩薩摩訶薩。以如是等無量善根廻向。令一切衆生究竟一切智。
 『大方廣佛華嚴經』（八十華嚴）卷第二十三（大正蔵，10巻，124頁c28行-125頁a1行）：
 佛子。菩薩摩訶薩。以諸善根。如是廻向。平等饒益一切衆生。究竟皆令得一切智。
- (14) 拙稿、戸田裕久「廻向と代受苦——『華嚴經』「十廻向品」を中心に」（仏教思想学会『佛教學』第51号，2009年，1-12頁）1-2頁。拙稿「廻向と代受苦——拔苦・受苦・忍苦の菩薩行に関する一考察」（立正大学法華經文化研究所『法華文化研究』第36号，2010年，17-46頁）18-19頁。
- (15) 拙稿「廻向と代受苦——『華嚴經』「十廻向品」を中心に」（前掲，2009年）4-12頁，15-20頁。拙稿「廻向と代受苦——拔苦・受苦・忍苦の菩薩行に関する一考察」（前掲，2010年）33-36頁，44-46頁。
- (16) 梵本の校訂者セシル・ベンドールが着手し、彼の没後は共訳者 W. H. D. Rouse が Louis de la Vallée Poussin の協力を得て完成した、英訳本における「金剛幢經」〈3〉相当箇所は次の通りである。
Śikṣāsamuccaya : A Compendium of Buddhist Teaching Compiled by Śāntideva Chiefly from Earlier Mahāyāna Sūtras, Translated from the Sanskrit by Cecil Bendall and W. H. D. Rouse (First edition: London, 1922 ; Second edition : Motilal Banarsidass, Delhi, 1971), p.255, l.12 - p.258, l.24.
- (17) なお、梵本『シクシャーサムッチャヤ』の原文を提示するに当たり、あらかじめ次の2語に注意喚起しておくことにより異同を逐一注記することに代えたい。ベンドール校訂本 ŚS. B. では写本にもとづき satva とある語が、ヴァイディヤ本 ŚS. V. ではすべて sattva- に直されているが、ŚS. B. に従い、satva-, bodhisatva-, mahāsatva- 等とする。また、ŚS. B. では duṣkha- とある語が、ŚS. V. ではすべて duḥkha- とされているが、ŚS. B. に従い、duṣkha- とする。
- (18) ŚS. B. p.280, l.6 (ŚS. V. p.148, l.17): vyavasyāmi utsahe は写本には vyavasyāmutsahe とある (ŚS. B. p.280, note 2)。なお、ut-√ sah- (1A) には「可能，できる，取えてする，試みる，喜ぶ」等の意味がある。漢訳仏典では「能，忍，堪忍，能堪忍」等と訳されている。荻原雲来『梵和大辞典』1451頁参照。
- (19) ŚS. B. p.280, ll.6-7 (ŚS. V. p.148, l.17): palāyāmi について √ palāy- (1A) 「逃げる」はアートマネーバダ動詞であり、palāye とするのが正しいが、ここではパラスマイバダの人称語尾が用いられている。
- (20) ŚS. B. p.280, l.9: parimocayitavyā, mayā …; ŚS. V. p.148, l.19: parimocayitavyāḥ / mayā …
- (21) 六十華嚴に「度脱一切生老病死…」とある部分は、文脈から判断して八十華嚴の「令得出離」に合わせて使役の「令」を補い「[令] 度脱一切生老病死…」として読む。
- (22) ŚS. B. p.280, l.13 (ŚS. V. p.148, l.23): praṇāśa-paryavasāna[h] の paryavasāna- は「終，尽，究竟」を意味する語であるが、paryavasthāna- 「纏，纏縛，著，心惑，倒起惑，諸牽引，曠」の転訛との見解もある。『梵和大辞典』763頁参照。試訳では「破滅への思いに纏わりつかれており」と訳した。
- (23) 六十華嚴の「令…具足善根究竟一切智」は、八十華嚴の「願…究竟成就一切種智」を参考にして、「令…具足善根 [成就] 究竟一切智」と補って訳す。
- (24) ŚS. B. p.280, l.18: pratārayitavyā ātmanā …; ŚS. V. p.148, l.27: pratārayitavyāḥ / ātmanā …
- (25) ŚS. B. p.281, l.4 (ŚS. V. p.148, l.32): tatrātmā とあるが、書写の際に1音節分を書き落したのではなからうか。正しくは、tatrātmanā であろうと思われる。
- (26) ŚS. B. p.281, l.4: niṣkretavyaṃ; ŚS. V. p.148, l.32: niṣkretavyaṃ これは注(17)で示した ŚS. B. duṣkha-; ŚS. V. duḥkha- と逆転しているが、連声規則上、i 音または u 音を直前に有する ḥ 音は後続する k 音または kh 音と接するとき、任意に ḥ 音または ṣ 音になりうるのであるから、何ら問題はない。
 -iḥ + k > -iḥk- / -iṣk-, -iḥ + kh > -iḥkh- / -iṣkh-, -uḥ + k > -uḥk- / -uṣk-, -uḥ + kh > -uḥkh- / -uṣkh-
- (27) ŚS. B. p.281, l.5: -kāntārāt / ahaṃ ca …; ŚS. V. p.148, l.32: -kāntārāt / ahaṃ ca …

(28) ŚS. B. p.281, ll. 5-6 ; ŚS. V. p.148, l. 33 : … śarīreṇānubhaveyam / sarvasatvanidānamahaṃ ca …

このようにベンドール校訂本もヴァイディヤ本も共に、śarīreṇānubhaveyam と sarvasatvanidānamahaṃ の間に句読符号 / (daṇḍa) を付けて、sarvasatvanidānam を ahaṃ 以下の文の冒頭に置いている。しかし、ahaṃ ca の ca という接続詞の位置から ahaṃ が文頭の語であると推測され、また文脈から判断しても sarvasatvanidānam は直前の文の末尾に置かれるべきものと思われる。従って、句読符号の位置を次のように修正して読む。… śarīreṇānubhaveyam sarvasatvanidānam / ahaṃ ca … なお、sarva-satva-nidānam は少し前 (ŚS. B. p.281, l.2 ; ŚS. V. p.148, l. 30) に見られる sarva-satva-parimocana-nidānam と同じでなくては意味が通らない。書写の際に parimocana を書き漏らしたか、原本において既にその語が省略されていたかのいずれかであるが、おそらく前者であろう。ここでは強いて校訂本に修正を加えず、parimocana を補った形で翻訳するにとどめる。

(29) ŚS. B. p.281, l. 9 : saṃprasthito nāpi … ; ŚS. V. p.149, l. 3 : saṃprasthitaḥ , nāpi …

(30) 拙稿「廻向と代受苦——抜苦・受苦・忍苦の菩薩行に関する一考察」（前掲，2010年）27-28頁，41-42頁。拙稿，戸田裕久「華嚴経探玄記における代受苦」（『立正大学大学院文学研究科紀要』第34号，2018年，1-11頁）7頁，11頁。

(31) 華嚴経「十廻向品」全体がかなりの分量であるのに比して、『大乘集菩薩学論』に引用される「金剛幢経」または「金剛幢廻向」の文章の量はさほど多くはない。それにもかかわらず、シャーンティデーヴァにより厳選された引用文の中に、筆者が強く関心を寄せている「代受苦」に関する記述が含まれているのを見つけたとき、筆者は静かに驚喜した。サンスクリット語原典での用語を知るための貴重な資料に巡り合えたことに、密かに興奮した。この幸運な巡りあわせに、不思議な縁すら感じた。しばらくして、かの尊聖シャーンティデーヴァ師も、この同じ経文に心揺さぶられたのだ、と思い至ったとき、一千数百年の時の隔たりを超えて思いが通じた気がして、心が震えた。兜率天にて恒に佛法を説き給う金剛幢菩薩、そして、敢えて五道に住し菩薩行を説き自ら行じ給う寂天菩薩に、甚深の報恩感謝の念を以て帰依し奉る。また、その功德の廻向を以て、世人に遍く安寧と健勝のあらむことを祈念しつつ、

安田治樹博士の古稀の芳壽を言祝ぎ 謹んでこの小論を奉呈致します

Summary

The Substituting for Suffering of Others (*Daijuku*) as a Virtuous Conduct of Bodhisattva in the Vajradhvasūtra or the Diamond Flag Sutra Quoted in the *Śikṣāsamuccaya* and Its Classical Chinese Version

Hirohisa TODA

The *Śikṣā-samuccaya* is a compendium of Buddhist learning of virtuous conducts and consists of concise explanations and plenty of quotations from various Mahāyāna sūtras, as is suggested by the name of its classical Chinese version, the *Dàchéng-jī-bèisà-jíào-lún* (大乘集菩薩學論). According to its Tibetan translation and commentary, the author and compiler of the text is Śāntideva (circa 650 to 700 CE), although Dharmakīrti (circa seventh century CE) is referred to as the author in the Chinese version. It is said that Śāntideva was a Buddhist monk and scholar belonging to the Prāsaṅgika branch of Mādhyamaka school, and wrote the *Bodhicaryāvatāra*, the *Śikṣāsamuccaya*, and the work named 'the Collection of Sūtras'. Unfortunately, the third work was dispersed. Both of the former two works explain and exhort virtuous conducts of Bodhisattva as one of the ways to enlightenment from the stand point of śūnya.

The *Śikṣāsamuccaya* quotes approximately ninety titles and various kinds of Buddhist scriptures such as the Wisdom Sūtras (般若經), the Vimalakīrti-sūtra (維摩經), the Lotus Sūtra (法華經), and others. Among them, the Daśabhūmika-sūtra and the Gaṇḍavyūha-sūtra formed parts of the large book of the *Huà-yán-jīng* (華嚴經) in classical Chinese versions. Similarly, the scripture in the name of the Vajradhvasūtra, meaning the Diamond Flag Sutra, or the Jin-gāng-chuáng-jīng (金剛幢經) in Chinese, being quoted in the *Śikṣāsamuccaya*, is inferred to have formed a part of the *Huà-yán-jīng* in two versions

as the chapter of ten kinds of the transfer of merit of Vajradhvaja Bodhisattva (金剛幢菩薩十廻向品) of the large book consisting of sixty volumes (六十華嚴) as well as the chapter of ten kinds of the transfer of merit (十廻向品) of that consisting of eighty volumes (八十華嚴). On the one hand, almost complete set of Sanskrit manuscripts of the Daśabhūmika-sūtra and that of the Gaṇḍavyūha-sūtra exist, on the other hand, any sets of Sanskrit manuscripts of the Vajradhvaja-sūtra no longer exist. By means of collecting passages quoted in the *Śikṣāsamuccaya*, there may be prospect of attempt to restore the original text of the Sutra in Sanskrit.

The *Śikṣāsamuccaya* refers to the Vajradhvaja-sūtra four times and quotes considerable amount of passages from the Sutra in three places as following, in the first chapter explaining the perfection of virtuous contribution (dāna-pāramitā), in the twelfth chapter explaining the preparation of mind (citta-parikarma), and in the sixteenth chapter explaining the method of excellent conduct (bhadra-caryā-vidhi) of Bodhisattva. This paper focuses on descriptions of the concept of *daijuku* (代受苦) in quotations from the Vajradhvaja-sūtra in the third place mentioned above.

Daijuku means 'substituting for suffering of others', and it indicates a special act that someone substitutes (代) for other living beings so as to accept (受) any sufferings and difficulties (苦) as retribution for others' evil acts. Such a substituting is extraordinary enough to deviate from the moral law of cause and effect, and difficult for ordinary people to do it. The substitute, i.e. the subject of *daijuku*, is an ideal character performing good deeds and roles, that is a great Bodhisattva in truth. The concept of *daijuku* is illustrated in the context of the first of ten kinds of the transfer of merit, i.e. *ekō* (廻向) in Japanese, in that chapter in the *Huàiyán-jīng*. The first *ekō* was named as 'ekō rescuing all living beings and letting them renounce worldly aspect (救護一切衆生離衆生相廻向)'.

It can be expected that descriptions of *daijuku* is to be the key to identify quotations from the Vajradhvaja-sūtra in the *Śikṣāsamuccaya* with the chapter of ten kinds of the transfer of merit in the *Huàiyán-jīng*. I translated passages containing the descriptions of *daijuku* in the *Śikṣāsamuccaya* from Sanskrit into Japanese, and compared it with its Chinese version (大乘集菩薩学論), the *Huàiyán-jīng* consisting sixty volumes (六十華嚴), and that consisting of eighty volumes (八十華嚴). The results are as following. It was turned out that the Chinese version (大乘集菩薩学論) is not such a good one but an abridged translation not enough to trace sentences back to its original Sanskrit text.

Passages of the Vajradhvaja-sūtra quoted in the *Śikṣāsamuccaya* are almost correspondent with descriptions in both of two versions of the *Huàiyán-jīng*. Consequently, I found out several Sanskrit words and expressions which are nearly equivalent to *daijuku* and its synonyms for the substituting for suffering of others.